文化

大学祭雑感
祭りと酒と自己鎮魂歌

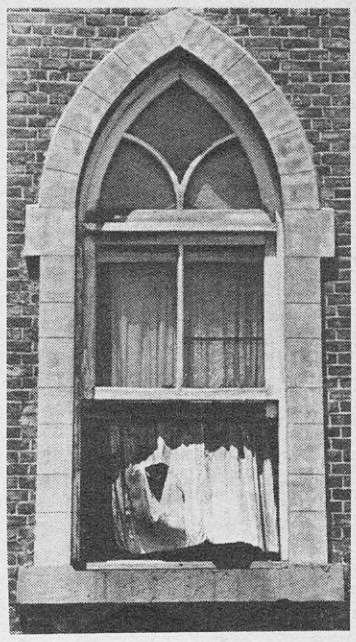
文学部講師　西村清和

今年も恒例の大学祭が行なわれた。いつも通りの奇妙でいかがわしい屋台が立ち並んで、剰さえポン引き迄横行するという風景は、話に伝え聞く戦後焼跡に立った闇市を想わせて、もしかして人間というものは世代を越えてこういった秩序定まらぬ混沌への郷愁を持ち続けているのかも知れない、などと考えたりもする。

所で大学祭と言うからには、これもまた祭には違いなく、実際少し気を付けて観察して見ると、そこにも祭を構成する基本的な枠組が、たとえどれ程頽落した形ではあっても尚、見て取れるのである。そのかみ祭りは、日常の生活から原理的に切断された特定の時間、即ち「ハレ」の日に、特定の空間の中で執り行なわれた呪術的な振舞いであり、それは例えば衰ろえた魂、つまり死に際にある者の魂を、呪術的に振り強めて再び生命力に充ちた魂へと、蘇生を促そうとする、死と再生に関わる鎮魂儀礼である。

記紀に見られる有名な天岩屋戸の神話もまた、一旦死して天岩屋戸に没した太陽神天照大神の魂を、天釦女命の俳優（ワサオギ）（即ち魂を招き、依り憑かせ、これを「フル」ワザ）によって、再び世界へもたらそうとする魂振りの祭儀である。所でこの俳優は、女性神天釦女命のヌードダンスを見て八百万の神々がどっと笑ってどよめくという神遊びであり、ここに祭と遊びとの本質的な連関が見てとることができる。

確かに遊びもまた、日常の労働の生活とは区別された振舞いとして、元来ある定められた時期、場所に於てのみ許されるのであって、これを混同することは社会秩序への違犯となる。例えばママゴトも元来は盆に行き所のない精霊は現世に災いをもたらすと考えられた所から、これに食事を供して慰撫する盆かまど、盆飯、盆かゆと呼ばれる儀礼的な行事に由来し、しかもこの供養の任に当ったのが村の大人ではなくタブーから免かれていると考えられた少女達であったから、いわば信仰行事としてのママゴトは少女の仕事であって、これが娘ともなれば最早ママゴトをしてはならないのである。「源氏物語」で紫の上がひな遊びをしているのを見て待女が、十歳にもなってひな遊びをするのは忌みだとたしなめる所があるのも、ひな遊びが元来人間（ひとがた）の代りに穢れを負うてくれる人形を流す神事に由来するからである。



苦労の多い人間の生活の中へ神々は気「晴らし」として祭りの遊びを贈ったのであり、それ故、人は本質的に神々の玩具として、神々と共に遊んでいる時こそ、神々に最も近く在り、従って人として完全なのだというプラトンの言葉もまた、祭りと神遊びの本質に言及するものとする。

神遊びとしての祭りには、従って日常の生活秩序の一旦停止による、これとは異なった新たな秩序の現出、この領域的で定められた独自の振舞いを担うこととしての変身と、演技としての「俳優」、かくて日々の苦労にあって衰微した日常生活の「ハレ」の場での「気晴らし」になる死と再生の呪術が、基本的枠組として認れられるのである。

さて再び大学祭に戻ろう。日常は大学という社会的に認定された場所の一画に、忽然として現われたいかがわしげな屋台街は、市街の秩序が破壊された焼跡に新たに現出した無法の闇市にも似て、日常生活から見れば危険とも思われる独得の領域を形成し、しかもそこでは何よりも外から来た「マレビト」即ち、客人に対し饗応が行なわれるのもいかにも古体を遺している。たとえこの饗応が金銭との交換によるといった頽落した形に於ではあれ、「お客様は神様です」という言葉もある位だから、これもまた遠い昔の神遊びの集団的な記憶によるのだろうか。これが大規模なママゴトである以上、参与が許されるのは未だ社会的責務を課せられないコドモであり、また共同幻想を受け入れ、その中で課せられた各自の役割、即ちポン引きはポン引きの、バーテンはバーテンの役割を演じ、俳優する共犯者たらねばならない。尤も遊びがある限られた時空間でのみ社会的に公認され、従ってみだらに遊びの世界と日常の世界とを、混同するのは禁忌である以上、遊びの場で飲んだ酒の為に道路上で飲酒運転で捕まるのは止むを得ないというべきである。

それが一つの「ゴッコ」である限りで、これに参与するのには、各自が現実世界の只中に現出した非現実的な仮象世界という

それにしても、この現代の神遊びが招き、これを振り動かし、惑は鎮める当の相手は何者なのであろうか。今年の大学祭のテーマが「そろそろやろうか」だった所を見れば、それはかつての神遊びがそれに奉げられた所の超越存在、例えば、神々やその体系としての神話、或はその世俗化としてのイデオロギーや理念ではなく、精々日頃充たされず衰微して働かなくなった参加者自身の魂を自ら振り強めようとする自己鎮魂にすぎないのであろうか。そしてその充足の為には、飲み食いが最も手取り早いという訳なのであろうか。

岡山大学新聞一・二月合併号
特集「保安処分を問う」

●映評●　「愛と悲しみのボレロ」

戦争によって人々の運命は流転してゆく

この物語は、第二次世界大戦をはさんで、四つの国の四つの音楽家族の、親子二代三代に渡っての出会いと別れを綴った壮大華麗な物語である。ニューヨーク、モスクワ、パリ、ベルリンで、それぞれ音楽によって結ばれた家庭が平和に幸せに暮らしている。しかし第二次世界大戦によって、それぞれの運命は大きく変えられる。それぞれの愛が引き裂かれ、踏みにじられ、悲しみに満ちたドラマをいくつもつくっていく。戦争が終わっても人々は悲しみと憎しみに心に大きな深傷を負ったまま、親子二代三代と懸命に生きようとする。そして、その後数十年間、それぞれの家族はまるで見えない一本の運命の糸にたぐり寄せられるようにして、ある一つの方向に向かって生きていくようになる。そして、お互い本人達が気づかないうちに子孫達が出会いを繰り返し、最後にそれぞれの家族がパリのエッフェル塔で、一緒に、一つの音楽を成功させるようになる。

愛と悲しみのボレロ

それは、人はすべて見えない縁で結ばれているのではないかということを信じさせてくれる出会いである。愛の別れの哀しみと、出会いの喜び不思議さを、それぞれの国の音楽、ジャズ、バレエ、シャンソン、クラシックに乗せて、見事に、淡々と描ききっている。

また、この映画では監督ルルーシュも語っているように、戦争に対する憎しみが大きなテーマの一つとなっている。パリの新婚夫婦は、子供も生まれて幸せな日々も束の間、戦争が始まるとユダヤ人であったためにナチのユダヤ人狩りにあい、まるで家畜のように列車に押し込められてパリからドイツの強制収容所に送り込まれる。その時、生まれたばかりの赤ん坊だけは助けようと、夫は悲鳴をあげていやがる妻から乳飲み児を引き離し、列車から線路に赤ん坊を捨てる。それが我が子の命を救う唯一の方法だったのだ。やがて戦争が終わって一人生き残った妻は、あの時列車から捨てた赤ん坊をその後数十年間探しまわるが、結局、成長した子供がやっと母を探し出した時には、母は気がおかしくなって、精神病院で恍惚の人となっていた。

ベルリンでは、戦前、ピアノの演奏会でヒトラーに祝福された演奏家が（カラヤンがモデル）戦争によって全てを失ない、妻だけに励まされて、戦後、世界の一流指揮者にのし上がっていく。そしてアメリカ、カーネギーホールでの晴れの演奏会。切符は全て売り切れたのに客は二人しか来ていない。屈辱の中で毅然とタクトを振り演奏を終えた彼の頭上に降ってきたのはヒトラーと握手している昔の写真だった。つまり、ユダヤ系アメリカ人が切符を買い占めてボイコットを図ったのだった。

戦争は平和を壊すだけでなく、なんと多くの人々の愛を壊し踏みにじり、人の心に悲しみと憎しみを焼きつけることだろう。

レコ評
ペンギン・カフェ・オーケストラ

現在、様々な音楽形態がある中、新しい音楽形態を作ろうとすると、現存の形態を複合することが多いのではなかろうか。例えば、英国のロックシーンを見れば。

このペンギン・カフェ・オーケストラは、サイモン・ジェフスを中心人物として必要な時に応じて集合するといった固定されない自由な形態をとったグループである。このサイモン・ジェフスという人物は、ライナーノートによれば、クラックギターを学び、またそれと同時に一般音楽理論を学んだ。後になり、電子音楽実験的音楽の作曲を専門に勉強仕始める。そして、72年ごろになると、ペンギンカフェ・オーケストラの構想が出来ていた。その

彼は、音楽言語を求め始めた。その結果、アフリカ、ベネゼエラ、アメリカのケイジャン、カントリー、ブルース等、また、スコットランド、アイルランド、その他諸外国音楽の中で、ソフトなものを聴き始めていた。その様な中、彼は、これらの音楽が語りかけてくれるものを、今度は自分自身の音楽言語で彼らの時代、文化を表現したいと考えた。そして、その努力を続け、その結果として、このペンギン・カフェ・オーケストラが出たのである。

このオーケストラが奏でる音楽は、ヴァイオリン、アコーディオン、パーカッションなど、様々な楽器を使いながら、先に述べたあらゆる国の民族音楽をモチーフにし、そこに伝統的な手法を持ちいた、既成の音楽概念を打ち破った自由奔放な音の世界がある。

どの曲もギスギスとしたところがなく、あくまで自然に、心地良くながれていく。

音の構成などを、主に楽しんで聞く人には、なかなか興味がわく、一枚であろう。

（す）